

冷水峠森づくりの会
「仁木町」

旧アリスファームで森林再生めざす

標高320mの冷水(ひやみず)峠周辺に広がる4ha足らずの森林が、私たちの活動場所です。日本海が見える風光明媚な土地で、旧「アリスファーム」が残っていた建物「山の家」を囲む森は、山菜の宝庫でもあります。現在の森の所有者は、社会福祉法人札幌協働福祉会です。

福祉会は当初、障害を持つ利用者さんの宿泊施設として森と建物を活用する計画でした。しかし、2011年3月11日の東日本大震災にともなって東京電力福島第一原発がメルトダウンを起こして大量の放射能を放出し、福島や近県の子どもの健康被害が心配されたことから、同年の夏休みから東北の子どもたちをこの森に招いて、汚染のない場所で一カ月を過ごしてもらう保養キャンプ事業を始めました。いまも夏と冬に実施しています。

この事業にはたくさんのボランティアが協力してくれて、福島の子どもたちは、森林観察会やスノーシューハイキング、木工体験などを楽しみ、森の中で自然を満喫しています。受け入れる私たちとしても、四季折々の自然が楽しめるこの場所で、ただ遊ぶだけでなく、森に学び、ともに生きる場所として、この森を育てていこうと考えるようになりました。

対象森林は60%が50年生のカラマツ人工林、5%が48年生のトドマツ人工林、残りは急傾斜地に林齢82年の天然性広葉樹林が広がっています。人工林は風倒木や枯損木が目立ち、荒廃が進行していましたので、2016年から交付金を利用して森づくりの活動を始めました。

林・福連携の取り組みで森を活用

私たちのグループには、札幌協働福祉会と「山の家を支える会」(福島)、また地元の農家が加わっています。「山の家」利用者が自然と親しめるよう、いろんな生き物が共生できる場として森を再生すること、キノコや山菜、木材・薪など資源生産の場にする、人工林に手を入れて、最終的には自然林を再生することをめざしています。

改めて調査してみると、カラマツ人工林は平均樹高16.5m、平均胸高直径16.8cmと、密生のせいで太くならないでいることが分かりました。そこでまず残すべきNo.1を決め、それ以外のカラマツを優先的

に間伐しています。ササの侵入も深刻でしたが、刈ってみると、広葉樹の幼木が育っているのが見つかりました。間違っって切らないよう注意しながら作業しています。

間伐材は薪の材料として活用しています。道内では「ミズナラ信仰」が根強く、「カラマツの薪は火持ちが劣る」などと言われがちですが、しっかり乾燥させれば火力の強い燃料になります。前年度の間伐材を薪にして、今年度から販売を開始しました。

この森でシラカバ樹液を採取すると、最盛期には1日20リットルにもなります。煮沸消毒後に冷凍保存し、シラカバ樹液石けんを作っています。また札幌協働福祉会の利用者さんに作業してもらって、シイタケの原木栽培を進めています。いま「農(業)・福(祉)連携」がクローズアップされていますが、私たちのこの取り組みは「林・福連携」といえるかも知れません。

交付金を利用してつくった作業道によって、間伐材の搬出が容易になりました。間伐で苦勞するのは、切ることより運び出すことです。冷水峠のように斜面が多い環境ではなおさらです。そんななか、新たに導入したPC(ポータブル・キャブスタン)ウインチは、小型軽量ながら、4mの長さに切った間伐材を一度に4本まで牽引可能で、重宝しています。

遊歩道・作業道の開設と間伐・ササ刈りによって、暗かった森が見違えるように明るくなり、利用者が入りやすい環境が整いました。今後も森林の利活用を活発化させ、森の果たす役割に理解を深める機会を増やしていきたいと考えています。



報告者

富塚 廣さん

